

◆ 今週のコメント

- ・ インフルエンザの定点当たり報告数は、0.97(66例)で、平成21年第48週(11月23日～29日)に減少し始めて以降、初めて1.0を下回りました。
第1週～第6週の間京都市衛生公害研究所でPCR検査を実施した53例のうち、37例からA型インフルエンザウイルスが検出され、そのすべてがAH1pdm(新型)でした(16例は陰性)。
- ・ 感染性胃腸炎の定点当たり報告数は、9.27(380例)で、第5週に比べ減少しましたが、依然として過去5年平均値(5.82)を上回っています。年齢階級別では、1歳が54例(14.2%)と最も多く、5歳以下が54.5%(207例)を占めています。
- ・ RSウイルス感染症の報告は、31例(0～5歳)で、感染症法に基づく届出の対象となった平成15年第45週(11月)以降で最も多い報告数となっています。年齢階級別では、1歳が11例(35.5%)と最も多く、1歳以下が20例で64.5%を占めています。

◆ 今週のトピックス: <A群溶血性レンサ球菌咽頭炎>

定点当たり報告数は、1.34(55例)で、第53週以降、報告数が増加しており、本年度で最も多い報告数となっています。詳細をトピックス(3枚目)に掲載しています。

◆ 特集: 平成21年の麻しんのまとめ

平成21年の麻しんのまとめを4枚目に掲載しています。

◆ 発生状況

全数報告の感染症

- ・ 四類: レジオネラ症(肺炎型) 1例【1月以降の累積報告数 1例】
- ・ 五類: アメーバ赤痢(腸管アメーバ症) 1例【1月以降の累積報告数 2例】

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.97	66
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	9.27	380
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.34	55
	③ 水痘	1.20	49
	④ RSウイルス感染症	0.76	31
	⑤ 流行性耳下腺炎	0.63	26
眼科	流行性角結膜炎	0.40	4

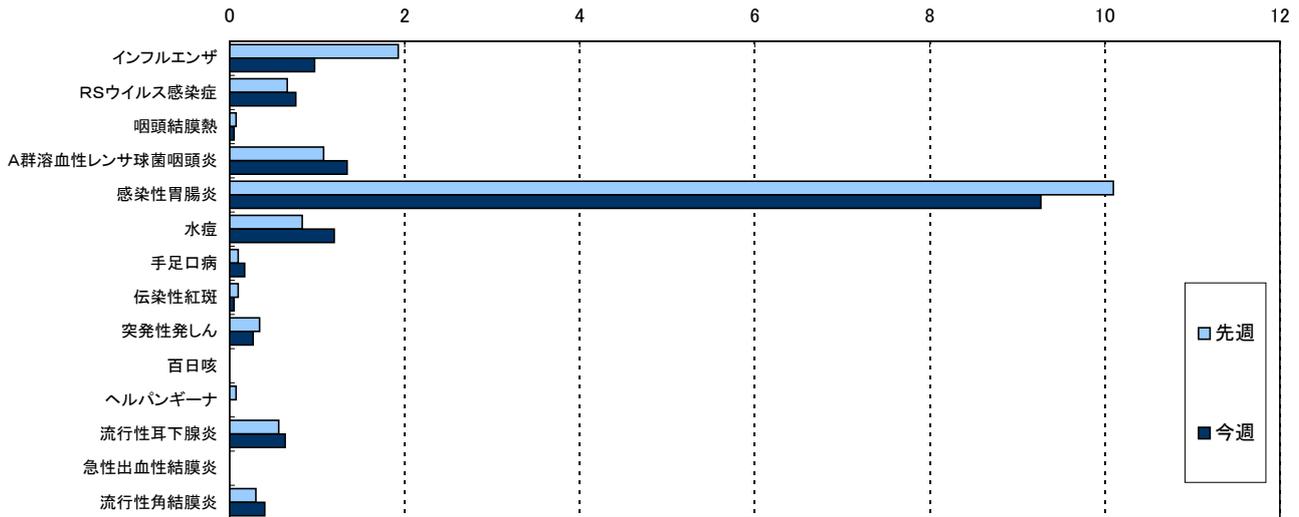
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <A群溶血性レンサ球菌咽頭炎> / 特集: 平成21年の麻しんのまとめ

(注) 京都市のデータは、平成22年2月18日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在の保健所での集計で、患者の住所を示すものではありません。

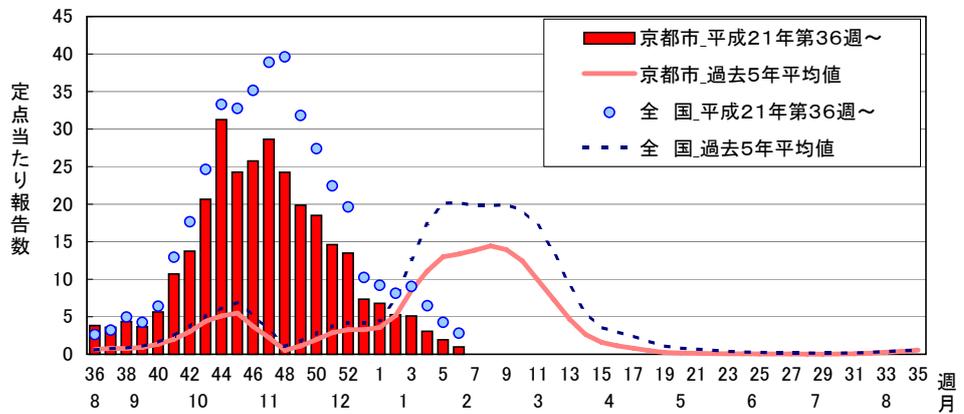
◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第6週)と先週(第5週)の定点当たり報告数の比較



2 インフルエンザの推移

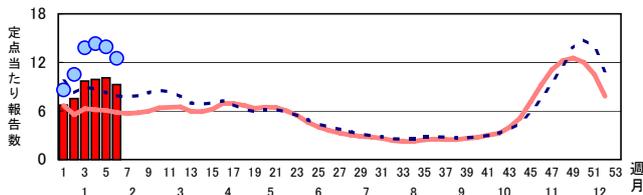
週	報告数(例)
第2週	359
第3週	347
第4週	208
第5週	131
第6週	66
累積報告数 (第36週以降)	20212



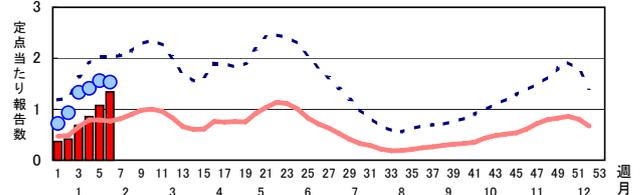
3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>

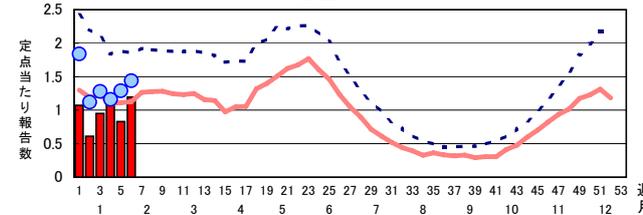
1 感染性胃腸炎



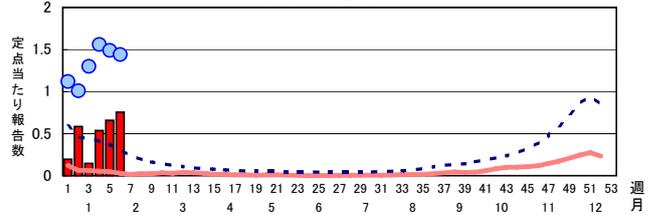
2 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎



3 水痘

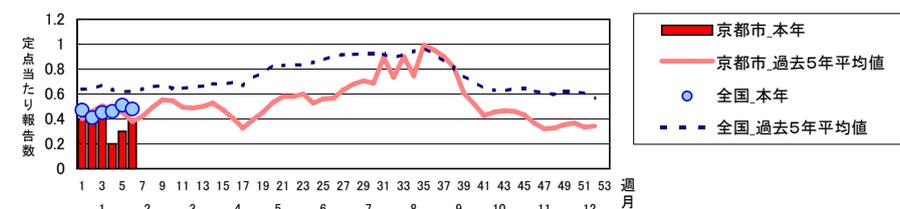


4 RSウイルス感染症



<眼科定点>

流行性角結膜炎



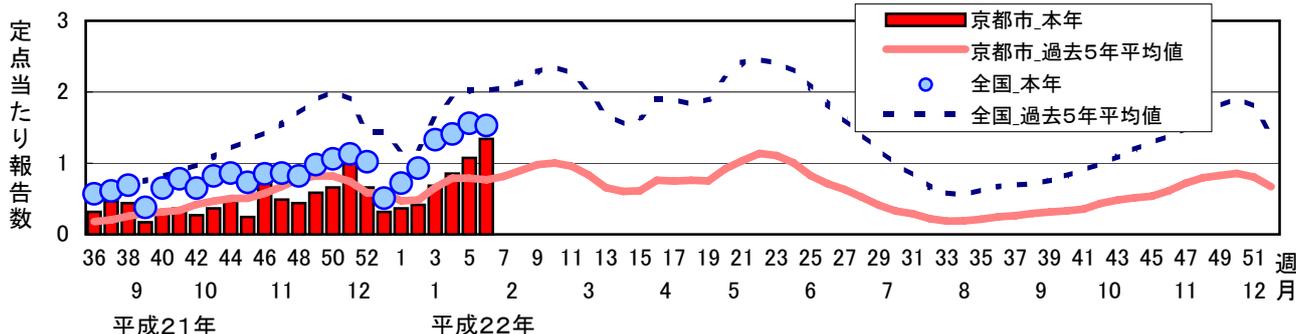
第6週(2月8日～2月14日)トピックス: <A群溶血性レンサ球菌咽頭炎>

定点当たり報告数は、1.34(55例)で、第53週以降、報告数が増加しており、本年で最も多い報告数となっています。

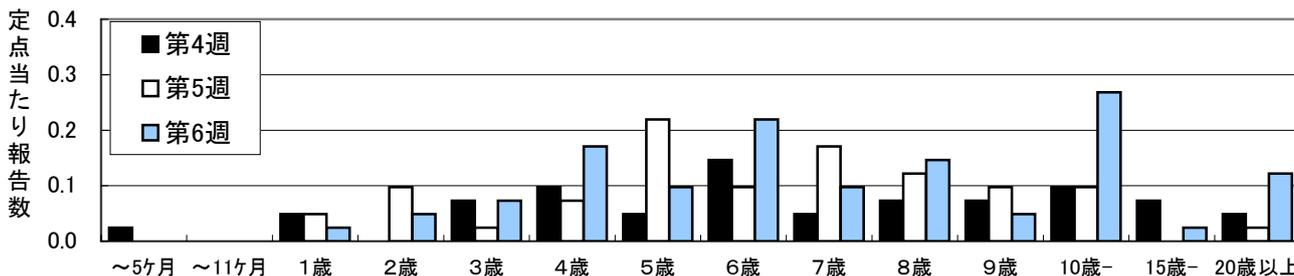
年齢階級別にみると、過去5年平均値では、4歳、5歳、6歳が多くなっていますが、今週は、10～14歳が最も多くなっています。

行政区別にみると、上京、右京、伏見、西京で、先週に比べて増加しています。

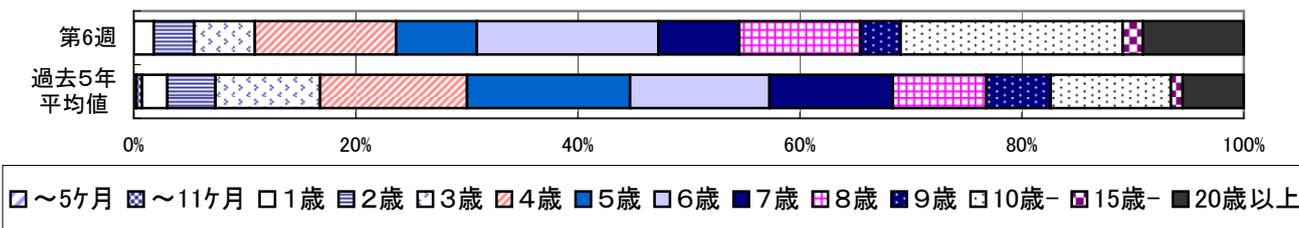
本市及び全国の定点当たり報告数 推移



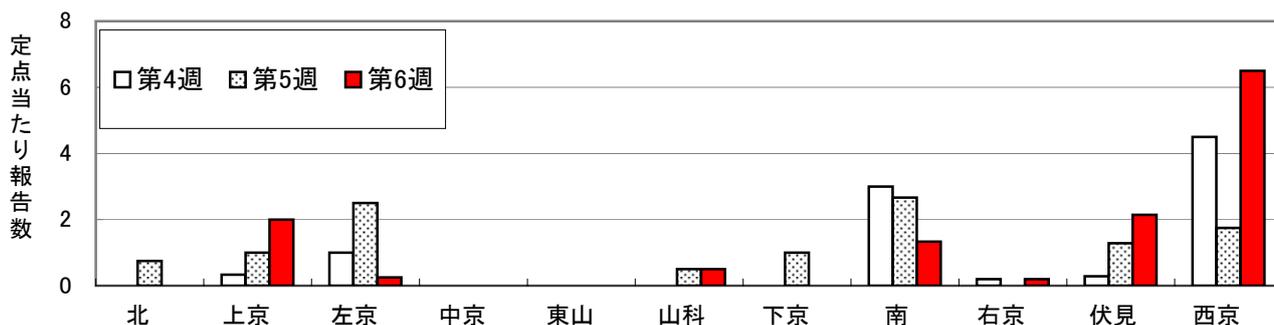
年齢階級別定点当たり報告数の推移



年齢階級別構成割合



行政区別定点当たり報告数の推移



特集：平成21年の麻しんのまとめ

平成22年2月18日現在、平成22年の麻しん患者の報告はありません。

平成21年の報告数は4例で、全数報告となった平成20年(106例)と比較すると激減しました。

これは、平成20年から始まった国の麻しん排除計画に基づき、従来のMR予防接種1期、2期に加え、3期中学1年生、4期高校3年生年齢相当の方を接種対象に追加したことにより、接種者が増加したことが一因であると考えられます。

麻しんの撲滅には接種率95%以上であることが必要ですが、本市の20年度実績では、1期95.0%、2期88.9%、3期86.1%、4期76.9%と、2期～4期で95%以上を達成していません。

京都市では、平成21年度から、京都府医師会、京都市学校医会、京都市市医会の協力を得て、京都市立中学校での集団接種を実施したことから、3期の接種率については、飛躍的な向上が見込まれていますが、今後は、4期での接種率が低迷しているため、4期における接種率向上に向けた取組が急務となっています。

今後とも、医療機関の皆様におかれましては、未接種者への今一度の積極的なお声掛けをお願いしますとともに、感染拡大防止及び迅速な対応のため、麻しんを診断された場合には、直ちに保健所に届け出ていただきますようお願い致します。また、届出後であっても可能な限り検査診断を実施していただきますようお願い致します。

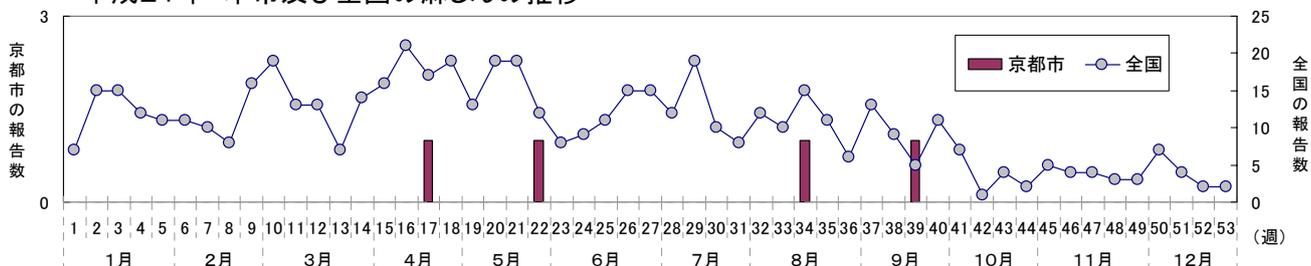
なお、京都市衛生公害研究所のホームページでは、麻しん・風しん(MR)ワクチンの啓発ポスター(こどもの感染症)を掲載していますので、是非、御覧ください。

<http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000007130.html>

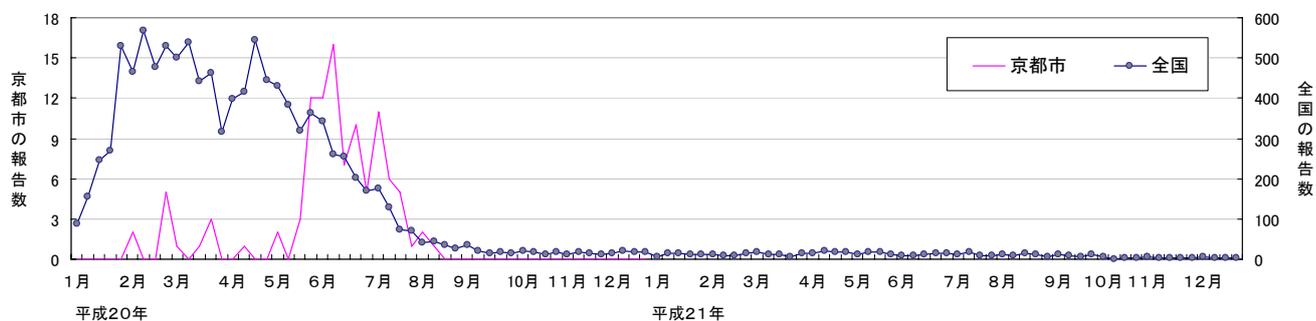
平成21年と平成20年の比較

		平成21年				平成20年			
報告数		4例				106例			
年齢		2歳, 19歳, 20歳, 24歳 各1例				15歳未満 53例, 15歳以上 53例			
		本市		参考: 全国(暫定)		本市		参考: 全国	
		%	%	%	%	%	%	%	%
病型	麻しん(検査診断例)	1	25.0%	245	33.1%	33	31.1%	3211	29.2%
	麻しん(臨床診断例)	2	50.0%	300	40.9%	69	65.1%	6780	61.6%
	修飾麻しん(検査診断例)	1	25.0%	191	26.0%	4	3.8%	1024	9.3%
ワクチン接種歴		接種歴なし 2例, 1回接種あり 2例				接種歴なし 62例, 1回接種あり 18例, 不明 26例			

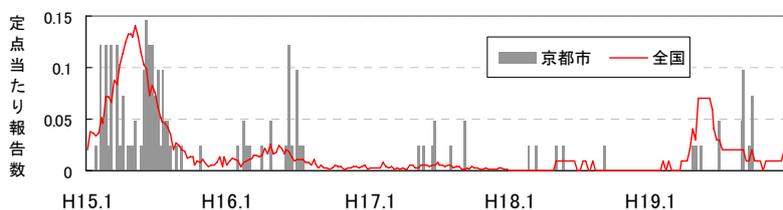
平成21年 本市及び全国の麻しんの推移



平成20年から平成21年の本市及び全国の麻しんの推移(全数報告)



本市及び全国の麻しん(*成人麻しん除く)の定点当たり報告数の週推移(平成15年～平成19年)



* 15歳以上を成人麻しんとする